英語教師のための
基礎講座

「音読のすゝめ」の巻

高梨庸雄　Takanashi Tsuneo
（京都ノートルダム女子大学教授）

1 音読小史

多くの国で民話や詩歌などを語り継ぎ歌い継ぎしてきた口承文芸の歴史がある。印刷機械が発明されてから，口承の比率が下降線をたどることになるが，近代に至っても印刷されたものを利用できるのは，かなりの期間，一部の階級に限られていた。現代に至って，先進国においては活字メディアはすべての人に開放されているが，リテラシー（読み書き能力）が低い国々においては，その恩恵に浴することのできない人々もいることを忘れてはならないだろう。

わが国でも誇るに足る口承文芸の歴史があり，平安時代の琵琶法師や江戸時代からの講釈（談）師のように職業として行われていたものだけでなく，全国各地に残っている民話の数が，我が国における口承文芸の豊かさを物語っている。

しかし，教育の分野における「音読」には流行り廃りがあり，第二次世界大戦後，かなりの期間，国語教育においても音読は下火になっていた。幸い，ここ 10 年ほど音読指導の復活が見られ，群読などの新しい試みを実践している学校も増えている。

一方，英語教育においては音声を伴わない授業は考えられないが，音読は，現在，どのような目的で行われているのであろうか？過去において，国弘正雄の『英語の話し方』（1970）で紹介された「只管（しかん）朗読」が音読への関心を高め，中学時代から音読を実践してきて，TOEFL で 650 点を取った日野信行（1987）の例もあって，音読を実践している教師の数も増えたが，日々の授業で活用されている音読の実際の指導法は，必ずしも確立されているとは言い難い。そこで音読が現在，どのような位置付けになっているのかを踏まえながら，授業への示唆をまとめてみたい。

2 英語教育における音読の意義

まず，次の 3 つの疑問を読者とともに考えてみたい（佐久間 2000）。

① 音読は内容理解を助けるかどうか？
② 音読は読みの速度を向上させるかどうか？
③ 音読は何を目的にして，どのように行うのがよいのだろうか？

① は音読をどうとらえるかによって違ってくる。音読は文章をよく理解した上で行うものと考えるなら，音読は教育的に重要であり，単文から文章までの音読をテキストの内容に照らして実践する価値が十分にある。観点別評価における「理解」とその音声「表現」にかかわるものとして，日々の授業においても留意すべきことである。

一方，音読はテキストを音声化することによって内容理解を助けるものととらえると，音声化の作業と内容理解の作業がぶつかり，「相互排除」する結果となり（Smith 1978；天満 1989），音読に注意がいく分，理解の方は下がるというトレードオフ（trade-off）の関係にあることが想定される。つまり，やみくもに音読させても内容理解には必ずしも結びつかないということである。これは，テキストの文頭にある数語を見ただけで，流暢にその文（章）を音声化できる生徒がテキストの内容を理解しているとは限らない例を現場の教師は経験的に知っている。

② の疑問に対しては，音読は読みの速度をある程度までは速めるのに役立つが，それ以上は期待できず，むしろ速度の向上にとって弊害となるという主張の方が多い（Sawyer など 1989）。

3 音読の活用法

これは③の疑問に答えることになるが，音読を効率的に活用するには，一言で言えば，テキストの文字情報，音声情報，内容理解を調和の取れた形で指導することに尽きる。それを実践してもらうには，下記の具体的なアドバイスが役に立つであろう。

① 従来の指導では，範読→斉読→個人音読十日本語訳→範読→斉読→個人音読の流れが多かったが，最初の範読は Oral Introduction を兼ねたものにし，次の斉読では基本的な Q&A を中心にテキストの概要を把握させるようにし，個人音読十日本語訳の代わりに重要事項（言語材料も含む）に関する具体的な情報（例文も含む）を提示しながら，生徒の理解をより確実なものにする。その後の流れは，テキストの具体的な例を指摘しながら，生徒に意味と音声との関係に注意を向けさせる。

② テキストを単に音声化するだけの音読ではなく，テキストを見ないで聞いている人にもわかるように（テキストの内容によっては，耳からだけの情報で聞き手が感動するように）読むことを心がける。学習指導要領（中学校）の言語活動（読むこと）にも「書かれた（内容を考えながら黙読したり，その）内容が表現されるように音読すること」と述べられている。これは高校では「文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する」（「リーディング」）ことにつながるものである。

③ ②で述べた事を実践するには，大学時代に学んだ音声学の基本をきちんと踏まえることである。すなわち，子音の中には，日本人が意識的に強く発音しないとよく聞こえないものがあることや，同じ母音であっても次に来る音が有声であるか無声であるかによって，その母音の長さが違うことに留意する。また，ポーズの置き方について，読む人によって多少個人差があるとは言え，基本的なパターンをしっかりとおさえて音読するのが教師の役割である。

④ 英語と日本語の音声面での違いの中で，特に際立つのはリズムであろう。英語の場合は基本的に強弱のリズムで，I'm sorry I can't. も He said it was true. もともに 5 音節で「弱強弱弱強」となるが，強音節間にある弱音節の数にあまり関係なく強音節間の間隔がほぼ等しくなる傾向がある。一方，日本語のリズムは高低アクセントのリズムで，音節は「子音十母音」（CV）のモーラ（mora）であるから，俳句や短歌のような文学形式が生れることになる。

4 音読の評価法

① 学習指導要領で「読むこと」に関連して「音読」という言葉が使われているのは次の 4 点である。（ア）「文字や符号を識別し，正しく読むこと。」（イ）「書かれた内容を考えながら黙読したり，その内容が表現されるように音読すること。」（以上，中学校）。高等学校では，「まとまりのある文章を音読したり暗唱したりして，英語の文章の流れに慣れること。」（「リーディング」），「文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読すること。」

② 学習指導要領の「話すこと」に記されていることも含めて，以下の観点は広い意味での音読を評価する際のポイントになる。

（ア）イントネーションが正確であるか。
（イ）区切りが正確であるか。
（ウ）リズムが正確であるか。
（エ）語を挿入したり省略したりしていないか。
（オ）緊張しすぎていないか。
（カ）悪い姿勢になっていないか。
（キ）書かれた内容が表現されるように読んでいるか。

日本の英語教育では，英語の深い読みと表現の指導に関する近江 (1984) のような優れた入門書や実践があるにもかかわらず，全国的には音読を表現にまで高めて実践している例は，残念ながらまだ少ない。しかし，そういう方向に向かって実践活動を続けている教師が増えつつあることは事実であり，これは，音読に限らず，わが国の英語教育の向上に大きな役割を果たすようになることを期待したい。近い将来，小学校で英語が教科として教えられるようになると，（幼）小，中，高，大と連続する一貫した指導理念の中で，音読もまた児童・生徒の発達段階に応じた指導カリキュラムを必要とするようになるであろう。

（引用文献はすべて高梨・卯城編『英語リーディング事典』研究社，2000 年に拠る。）